

宇井伯寿のテュービンゲン留学

西村実則

宇井伯寿（一八八二—一九六三）は晩年に短い自伝「第三十四世翁伯寿小伝」を書いている。あえて第三十四世と冠したのは曹洞宗僧侶としての自覚が根にあったためであろう。それによると、大正二年九月、曹洞宗大学講師の時、曹洞宗海外留学生として欧州留学を命ぜられ、ドイツに行ったこと、留学先はテュービンゲン大学であったものの、第一次世界大戦が勃発したため、やむなくイギリスに避難したとある。

宇井のドイツ出発に際し、同じ船に真言宗の神林隆浄、天台宗の池田澄達の二氏が乗船した。そのいきさつは渡辺海旭が「此際曹洞の宇井伯寿師、真言の神林隆浄師、天台の池田澄達師、梵学研究の為に船を同うして渡欧の途に上らんとす」（「宇井、神林、池田三氏を送る」）とした上で、とりわけ宇井について次のように紹介している。

宇井文学士はチュウビンゲン大学に懸籍し、ガルベ先生の指導を受けむとす、先生が印度哲学の造詣深遠なるは学界定評あり、特に数論哲学研究に於ては獨壇の名家、印度に遊ぶこと長くして爛燦たる筆力亦独逸文壇の雄なり、宇井師超邁の識力印度哲学の研究漸やく蔗を嚙むの境に入る、今や詩聖ウーラントの徜徉吟哦せる風光絶佳の地に於て曠世の碩学に師事す、其後來の見るべき真に健羨すべき哉。

これによれば、宇井の師となるリヒャルト・ガルベはインド哲学でもサーンクヤ学派研究の面で定評があり、イン

ドにも長く（実際は一年半）滞在した優れた学者である。インド哲学に打ち込もうとする宇井が「風光絶佳の地」テュービンゲンで研鑽を積むことになったのは羨望の的とある。

宇井にガルベを紹介したのは指導教授であつた高橋順次郎であつたろう。ただ実際には姉崎正治の助言があつたと思われる。姉崎はガルベが一時期ベルリンで教鞭を執つた際、半年間ほど氏の授業に参加していたからである。

テュービンゲン

テュービンゲンは南ドイツ・シュトゥットガルトからローカル線で約一時間ほどのところに位置する。大学が創立されたのは、日本で応仁の乱が終わつた一四七七年という古さであり、人口の約四割が学生と学校関係者という大学町である。哲学者ヘーゲル、シェリング、詩人ヘルダーリン、それに天文学のケプラーなどが学んだ。文学者ヘルマン・ヘッセ（一八七七一—一九六二）も青春時代をこの町で過ごしている。インド学の分野ではガルベが着任する前に『サンスクリット・ドイツ語辞典』をベートリンクとともに編纂したロートがおり、以後にグラゼナツプ、ティーマが順に教鞭をとつていた。

作家の辻邦生はこの町を訪ねて次のようにいう、「急な丘の斜面に並ぶ古風な大学町は、赤茶けた瓦屋根を立体派の絵のように組み合わせながら、頂きの城館まで迫り上つていた。ぼくら（北杜夫）は細い小道を上つたり下つたりして、町のおちこちを歩き、ヘルダーリンがヘーゲルやシェリングと肩を並べて散歩したのはこの辺りかと思ひながら、神学校ぞいの石塀のそばに佇んだ。」「ネカール河にかかる吊り橋から見ていると、北杜夫と歩いた中州は美しい緑に飾られて、さながら高貴な十八世紀英国絵画の風景である。静かな河の水面には白鳥が浮び、その影が鏡のよう

な水面に逆さまに映っている。午前十一時の太陽が、燃える暑熱を加えながら、橋の真上にかろうとしている。自転車に乗った可愛い少女が二人で橋を渡つてゆく。やがて下流からボートに乗った数人の若者が、なめらかなオールのかし方で、橋の下をくぐり抜けてゆく。こちらに向つて手を振る。静かで、充実に、華麗で、単純だ。ぼくはまたしても溜息をつく。溜息なんかつくまい、と大決心をしたにもかかわらず、この典雅な自然の静謐感と透明感には溜息が出るのだ。丘の緑の森に埋つた赤屋根が、太陽の光のせいだ、淡い靄をかけたように銀色がかつて見える。空は深い紺青に晴れている。真夏がこれほど純粹な美しさで輝くことが果して他処で可能だろうか」(『夏の光満ちてパリの時』)

あるいはやはり作家の多和田葉子によれば、「(エバーハルト) 橋の上から眺めるネッカー川の眺めは何度見ても風景画のようで現実のものとは思えない。柳が水面ぎりぎりまで垂れ、川岸は川の水の戯れに身をまかせ、まどろんでいる。岸はコンクリートで固められてなどいない。大きな船が通っているのは見たことがないから、多分浅いのだろう。夏には竿舟に乗ることもできる」。夜などは「小さな村なので、少し歩けばもう村を取り囲む大きな暗闇が広がっている」。(『溶ける街 透ける街』)

とあるように、テュービンゲンのネッカー河からみた風景を絵画のようであると感嘆するほどの美しい町である。グラレーナップの代になってからテュービンゲンを訪問した中村元は、「南ドイツの大学町テュービンゲンは人口五六千人しかない。散歩すると、数分歩けば森になってしまう。遊ぼうにも、遊ぶ場所もない。だから逆に、宇井先生のような方には、非常に勉強に良かったわけである」(『インド文明の先覚者を想う』『東方界』) といっている。

リヒヤルト・フォン・ガルベ

ガルベはテュービンゲン大学で「古代インドの主格複合語の抑揚法」の研究で博士の学位を取得。二十歳の時、大英博物館にある『シュラウターストラ』（バラモン教の家庭祭式）の研究調査のためロンドンに赴いた。二十八歳の時、インド・ベナレスに一年半ほど滞在し、インド人の学者（パンデイト）に就いてサーンクヤのテキストと『シュラウターストラ』を研究した。インド滞在記に『インド旅行スケッチ』がある。とはいえかれは現実のインドに対してはきわめて悲観的であった。滞在中、つねにマラリヤからの攻撃を受けたからである。

帰国後、『サーンクヤ・スートラ』とその注『カーリカー』を校訂翻訳。一八九四年、ケーニヒスベルク大教授となり、『サーンクヤ哲学』を出版した（この書については木村泰賢が「賛成し難い所が沢山あるけれども、材料豊富にして出所の正確なること、これに及ぶものがない」（『印度六派哲学』）と評している）。

その後、ルドルフ・ロートの後を継いでテュービンゲン大教授となった。

一九〇一年にはベルリン大学に出講。ベルリン滞在中であった姉崎正治が聴講したのはその時である。

一九〇五年、ヒンドウ教の根本聖典『バガヴァッドギーター』を独訳し、そのオリジナルとなったテキストを再構成しようと試みている。

晩年、キリスト教とインド思想の相互影響という壮大なテーマに着目し、『インドとキリスト教』を出版した。その前半はキリスト教へのインドの影響、後半はインドへのキリスト教の影響となっている。

ガルベの持論の一つは、サーンクヤ哲学は仏教思想に影響を与えたというものである。しかしこれは当時、オルデンベルクやイギリスのリス・デヴィズによって批判された。もう一つ、大乗仏教はキリスト教起源であると信じていた。これも今からみても、いかにも突飛な学説である。

宇井は留学当初、サンスクリットの辞典として何がよいかをガルベに訊ねた。宇井からの伝聞を中村元は次のように記している。

「(宇井) がある立派な辞書 (モニエル・ウイリアムス著) を示されたところ、ガルベは「ふん。そんな辞書があるのかい。やめてしまえ。ベートリンク・ロートの七巻本 (ドイツ語で書かれた) を使え」と厳命されたそうである。ガルベが英語のその立派な辞書の存在を知らなかったはずはない。全然、頭から、このように無視してかかるというような具合であった」。(中村元「インド文明の先覚者を想う」)。

これはイギリスのモニエルが編纂した辞典に対するガルベの独特な見方である。この『サンスクリット・イングリッシュ辞典』が完成に至るまでには荻原雲来、渡辺海旭の師であったドイツのロイマンものに参画した。しかしそれをガルベは頭から無視したのである。ガルベの推薦する七巻本『サンスクリット・ドイツ語辞典』の編纂にはテュービンゲン大の前任者ロートも参画し多大な精力を注いでいたため、もとより前任者に敬意を表する意味もあったろう。

宇井のゲッティンゲン訪問

宇井はテュービンゲンに滞在中、ゲッティンゲン大学を訪問している。この点は金倉円照による宇井の追悼文から知ることができる。「お話の中にドイツに留学された思い出があった。先生の師事されたガルベ教授が第一次世界大戦で一人むすこを喪ったこと、美しい東洋風の娘がガルベにあったこと、ゲッティンゲンの散歩道で、教授にひよっこり行きあわれた折りの挿話などである。五十年前の楽しい追憶に、先生はしばらく耽(ふけ)られたのである。」(「宇井先生の業績」)

おそらくガルベは宇井を伴ってゲッティンゲン大学を訪問したのであろう(当時のことゆえ、二人が時期を異にし

て訪問したとは思われない。宇井は訪問中たまたまガルベと「散歩道」で鉢合わせしたという驚きを金倉に話したのであろう。

ゲッティンゲンもチュービンゲン同様、大学を中心として発展した大学町で、ドイツ統一後、再びドイツ中心部に位置するようになった。元来、貴族の子弟の入学が多く、またノーベル賞受賞者が三十数名あることにちなみ、「貴族の大学」「ノーベル賞の大学」（大西健夫『ドイツの大学と大都市』）と呼ばれている。数学、天文学のガウス、物理学のリヒテンベルクなどがいただけでなく、物理、化学を中心としたマックス・プランク研究所がある点でも有名である。「散歩道」とは街全体を星形に囲っていた城壁を撤去したあとを散歩コースにしたもののことをいうのであろう。

ヘルマン・オルデンベルク

宇井が訪問当時、ゲッティンゲン・インド学の教授だったのはヘルマン・オルデンベルクである。渡辺海旭がドイツ留学中、ヴェーダ研究においてその右に出る者はないといわしめた碩学である。ヴェーダ以外にパリー語文献を駆使して「原始仏教」という一分野を開拓した人の一人であり、パリー語の律蔵『ピナヤ・ピタカ』『テータガーター』などを校訂出版した。その著『ブッダーその生涯・思想・教団』はブッダの歴史的事実を解明した書である。その論証はブッダ生存当時、同時代のジャイナ教の祖マハービーラの生涯、ならびに隠者、苦行者という面で共通点が見られること、アシヨーカ王の建てた石柱の場所がブッダ誕生の地ルンビニーと符合したり、別の場所（イギリス人ペッペの住居）からブッダのものとと思われる舍利容器が出土したこと、ブッダの前半生、その種族、両親、母の若死、母の妹が養育したことなどからみても、「歴史的事実性」が感得されるというのである。

オルデンベルクは一九一二年から翌年にかけてインドを訪問した。ペナレスの地では偶然、日本の河口慧海、長谷部隆諦、増田慈良、溪道元、それに高楠順次郎らと出会い、増田慈良によれば、

「目下、滞在中なる独逸のオルデンベルヒ教授とは高楠博士の紹介にて二回程面会し、記念に共に写真撮影まで致し候、世界の学者たる同氏が懇切に面会の度に握手を求め、莊重なる英語を以て挨拶せられしは聊か光榮に存じ候」
『加持世界』一九一三年

と、オルデンベルクは自分のような者にまで太い声で会ったに握手を求めてくれたとある。オルデンベルクは『ブツダ』の書を数回に涉つて手を加えたが、インドを訪問後、その印象をさりげなく挿入している。オルデンベルクはピツシエルと共に校訂出版した『テララガーター』の一節、「修行者が」一人でおれば、梵天のごとくである。二人でおれば、二人の神のごとくである。三人でおれば、村のごとくである。それ以上でおれば、雑踏のごとくである。」（中村元訳『仏弟子の告白』と改訳）にふれて、「インドに行つて、人の押し合いへし合いするさま、あるいは争つたり罵つたりする托鉢行者の群れが押し合いへし合いするさまを身近に見たり聴いたりした者は、誰でもこの詩のとりわけ最後の句を首肯するであろう」と。

宇井がオルデンベルクを訪問したのは氏のインド帰国直後である。

イギリスへ避難

第一次大戦が勃発するや、宇井はドイツから戦火を逃れてイギリスに渡った。イギリスではインド局の図書館員であつたF.W.トマス（一八六七—一九五六）に就き、『勝宗十句義論』を英訳した。トマスはサンスクリットおよびチベッ

ト語の学者で、一八九八年から一九二七年までインド省図書館員のかたわら、ロンドン大学講師を務めていた。マクドネル（一八五四—一九三〇）没後、その後任としてオックスフォード大学教授となった。アシヨールカ王碑文、スタイン将来のチベット文献を専門とした人である。

『勝宗十句義論』の英訳について中村元はいう、

「特にその時期の不朽の功績は『勝宗十句義論』の研究である (H. U. i, The Vaisesika Philosophy)。これはインド古代に自然哲学を説いたヴァイシェシカ哲学の一つの古典が、そのサンスクリット原典は散佚してしまったのに、その漢訳が漢訳大藏經の中におさめられて、シナ・日本に伝わっているので、それを研究出版翻訳されたものである。ロンドンの王立アジア協会から出版され、世界的に高く評価されている研究である。この書は、實際に学者としての先生の名声を決定的ならしめたものである。外国で出版されたどのインド哲学史をとり上げてみても、先生のこの書に言及していないものは一つもない。まさに日本の学会の声價を高めたものであり、これ一つだけでもわれわれ日本人の学徒は外国の学者に対して肩身の広い思いがするのである。」（『インド哲学から仏教へ』あとがき）

『勝宗十句義論』は漢訳だけで伝わるヴァイシェシカ学派の哲学書であり、英訳するにはかなりの困難があったと思われる。宇井はそれをトマスの指導の許で進めたのである。

中村元が伝えるところによると、宇井はガルベの許でパーリ語も習ったという。それも学生と二人だったとある。中村はその学生の名前までフルストと詳しく伝えているから宇井の話を綿密に書き留めておいたのである。「ガルベは『自分はパーリ語は話せない』といった」。これについて中村元は、「その意味はパーリ語を読み書くことは自由自在だけれど、ちょっと話すのは慣れていない。しかしサンスクリットに到っては話すのも読むのも書くのも自由自在ということを含意している。ガルベはインドに長いいたから、それだけの自信を持っていたのである」という。

初期仏教や東南アジア仏教国で用いられるパーリ語とインド六派哲学の使用言語とは無縁であるが、宇井はガルベの許で基礎語学の一つとしてパーリ語も学んだのである。

宇井は生涯を通じて、インド哲学、仏教学の分野で多大な業績を残した。インド哲学に関しては、『印度哲学研究』の名のもと、執筆順に第一巻から第六巻まで刊行したが、その六巻目の「緒言」に次のようにある。

元来予は仏教の専門家ではない。また目下の事情上、その専門学者たらむことを望むものでもないが、印度の思想を研究する学徒としては、少くとも印度に於ける仏教の發達を知ることにより多大の努力を費さねばならぬから、其為に印度仏教の研究に進まむと希うて居るのである。

この時、宇井は四十八歳である。生涯を通じて仏教研究に多大な精力を注いだ宇井ではあるが、このことばは意外である。これは仏教研究を深めつつあるものの、自分の専門分野はあくまでもインド哲学であると表明したことばである。宇井は晩年、文化勲章を受賞したが、皇居での講書始めの際に、

自分をはじめは主として仏教以外のことを研究し、留学中も仏教以外のことをやって居ましたために、皆から「あいつは外道で……」とよく言われたものであります。自分は今もともと仏教専門家となろうという考えはなく、印度哲学一般の中に於いて仏教に其適当な地位を与えて研究するという方針を採って居ました」（特別講演「印度哲学」命名の由来）。

と、もともと仏教の専門家になるつもりはなかったと述懐している。

ドイセンと宇井

宇井が留学当時、キールには高楠順次郎や姉崎正治の師であつたドイセンがいた。宇井が帰国した後木村泰賢がイギリス留学の後半にキールのドイセンの許に赴いている。姉崎留学当時のドイセンは眼疾があり、ほとんど字が読めず、自分（姉崎）が原典を読み上げ、ドイセンがドイツでいうのを書き写したという。そうした理由もあつて宇井はドイセンの許に行かなかつたと思われるが、しかし他の理由もあつた。宇井はいう。

明治三十九年九月から一般的の印度哲学史が講ぜられて以来、其各方面に於ける細い研究の進歩したことは著しいことであるが、然し一般の傾向を見ると、最初期からドイセン氏の一般哲学史の初三巻に述べられて居る印度哲学の見方又は扱ひ方并に解釈が基礎をなして居ると思はる。実をいへば予自身も最初は氏にのみ傾倒し殆ど他の研究解釈を顧みないかの如くであつたが、後西洋に遊ぶで彼地の学界の状態の全く之に反するを見るに及むで、広く諸学者の研究成果及び原典資料を涉獵し、滞歐四年の初半期間は人知れぬ苦心の下に、足らざるながらもドイセン氏の影響の蟬脱に努力し、遂には氏の解釈取扱の正鵠を得ない点の少くない所以を理解するを得たと信ずるを得るに至つた。（印度哲学研究第四、緒言）

これによると、欧州に行つてみると、学界ではドイセンはもはや顧みられない実情を知り、氏の影響を極力排除しようとするといふ。

帰朝して後我邦の印度哲学界を瞥見すると、時やまさにドイセン氏の影響の全盛時期であつた。其明に誤つた解釈説明すら平然として奉ぜられ、而もそれ等が世界の学界の通説であるかの如く、又は我邦の研究者各自の自説であるかの如くにせられて居るものも皆無ではなかつた。かかる間に於て予は学界一般に対しても多少は其然らざる点を明にし、又特殊の人々に対しても個々の誤を指摘する所もあつた（同）。

帰国後もドイセンを無上の師とする風潮であつたため、それを正すよう人にも勧告したといふ。

極端にいふ場合には、誠に生意気ながらも、印度哲学に於てはドイセン氏の方法并に解釈が如何にも優れて居る如く感ぜらるる間は、自己の研究が尚未だ独立の地歩を得ず専門家の域に踏入らない所以であると判断する照準とするがよいとまで苦言することもある（同）。

宇井からみると、ドイセンの研究は概説的であるだけでなく、宇井は一つの論文（Samkhyayogaに就いて）で、ドイセンの学説を徹底的に批判している。ドイセンに言及する間は研究者とはいえないとまで極論した。

当時、一高、帝大の哲学界ではドイセン旋風が渦巻いていた。たとえば宇井の弟子中村元は一高時代に、熱烈なドイセン信奉者であった岩本禎（一八六九—一九四一）の講義を聴いている。のちに東洋大を創立した井上円了（一八五八—一九一九）も岩本同様、ドイセンの本を日本語訳したりして、ドイセンを高く評価していた。中村元もドイセンについて「比較思想の先駆者」であり、「西洋とインドの対比」また東西思想を歴史的に辿った学者と位置づけた上で、「インド哲学や仏教の思想的理解やそれを弘めるといふことになると、私はどうしてもドイッセンを第一人者として挙げたい。これは西洋の学者の誰もが皆、一様に認めているところである」「インド哲学を世界の思想史の中にきちんと位置づけたという点で、ドイッセンの功績はまごうべくもない」

「彼の学問に対する情熱、熱中した態度、特に広い視野から東洋思想を観るといふ態度には大いに影響を受けた」（「東西比較思想の開拓者ドイッセン」）。

と、ドイセンの研究方法、学問に対する情熱を高く評価している。

こうしてみると、ドイセンに対する宇井と中村の評価は正反対である。中村の信条は人の研究を批判する暇があれば、一つでも自分の論文を書きたい（伝聞）というものであった。

宇井が徹底して批判したドイセンではあるが、氏のもとから高名な弟子たちが育ったのも事実である。その一人に仏教写本研究の第一人者で、ゲッティンゲンの教授となったヴァルトシュミット（一八九七―一九八五）がいる。ドイセンはインドへ講演旅行に行ったことがあるが、サンスクリットを話すことができた。近代インドの宗教改革運動家ラーマクリシュナの弟子ヴィヴェーカーナンダ（一八六三―一九〇二）がニューヨークからドイツを訪問した際、ドイセンとサンスクリットで話している。サンスクリットを話せたドイセン（おそらく宇井の師ガルベも）。弟子にヴァルトシュミットなどのいたドイセン。こうした点でもドイセンは高く評価さるべき人である。

姉崎正治がドイセンの許に留学した当時、眼疾のあったドイセンは、ほとんど字が読めなかったというが、宇井がドイセンの許に行くことがなかったのは、以上のような事情があったからであろう。